

講演要旨

被覆栽培におけるタバコの着葉数に関する研究 第2報 苗令の相違と低温遭遇が葉数決定におよぼす影響

檜 原 幸 春

(日本専売公社鹿児島たばこ試験場)

タバコの着葉数は、被覆などによる温度のかさ増しによって増加するが、極端な葉数増加は葉たばこの品質低下を招くことから、葉数決定におよぼす温度の影響を明確に把握することが望まれた。そこで葉数決定に大きな要因となると考えられるタバコの苗令と低温遭遇時間とをとりあげ、葉数決定におよぼす影響を検討した。

その結果、低温遭遇期間が10日のときは、8～10枚苗

は影響をうけないが、16枚苗では影響をうける個体とうけない個体に分れ、14枚苗では葉数がすべて減少し、20日間になると10枚苗以上ではすべて葉数が減少することを確認した。したがって、低温の影響をうけて花芽の分化が起こり、葉数が決定される苗令は、出葉数が12枚以後であると考えられる。

佐賀県における稲作の多収性についての2・3の問題点

藤 井 義 典・江 副 浩・吉 富 研 一

(佐賀大農) (佐賀農試) (佐賀統計事)

佐賀県は昔から米どころといわれながら長く停滞を続けていたが、近ごろの収量の上昇はめざましい。しかし、それに伴う安定多収の技術体系を確立するまでには至っていないし、更に10a当り750～800kgの壁を打破することは今後に残された問題であると考えられる。

このような観点から、本県稲作の多収性を栽培技術の面から水管理に重点をおいて2, 3の問題点を追究したい。

1) 本県では九州の他県に比べて単位面積当りの穂数は多く、これを確保することはかなり容易である。しかし、これと相反する傾向をもつ一穂重をできるだけ低下させないようにすることに多くの問題がある。

2) それらの中、最高分蘗期から穎花分化期までの期間、Nの肥効を中断することに重点をおくより中干しによる水のかけ引きによって稲の生育を調節する方が本県では安全、有効であると考えられる。

重粘土湿田における暗渠排水の施工とその効果

立 野 喜代太・月 川 雄次郎

(九 大 農)

九大付属農場の水田ほ場は第三紀層重粘土壌で腐植に乏しく、透水性が極めて悪い半湿田であるが、合理的な水管理と水田作業の機械化、および裏作の作付を容易にするために、暗渠排水工事を行ない、乾田化をはかった。(1)施工内容：面積86.4a (26.4a 1966年, 60.0a 1968年施工), 暗渠排水(集・吸・捕水渠, 水閘など), 区画整理(地均し, 畦畔作り), (2)労力：粗朶結束・運搬 66.7hr/10a, 暗渠埋設工事および水閘作り 180.8hr/10a, 区画整理 67.3hr/10a, 合計 314.8hr/10a, (3)工事費：材

料費15,643円/10a (陶管14,460円/10a, 水閘用ブロック・砂など1,183円/10a), 人件費39,330円/10a, 合計54,973円/10a, 但し人件費は1,000円/8.0hrとした。(4)施工の効果：暗渠の効果は極めて良好で、乾田化に成功した。あわせて、9区画に細分されていた耕地を4区画に整理した結果、農作業は極めて能率的である。水稻収量は400kg/10aから500kg/10a以上に増収が可能になった。